人文研ブックレット ㊷

クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』に隠された民話

―国際民話話型カタログATUでは何番にあたるのか?―

フィリップ・ヴァルテール
（渡邉浩司訳）

公開講演会

クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』に隠された民話

―国際民話話型カタログATUでは何番にあたるのか?―

フィリップ・ヴァルテール
（渡邉浩司訳）

日時　2023年2月25日
場所　FOREST GATEWAY CHUO・ホール

主催　中央大学人文科学研究所

「人文研ブックレット」の発刊にあたり

人文科学研究所が主催した公開講演会、研究会、談話会、シンポジウムのうち、専攻を異にする研究員にとっても興味深く、研究者間の交流に役立つと思われる、例えば学際的領域を扱ったテーマのものを「人文研ブックレット」として発行することにしました。研究チームから提案のあった企画を含め、運営委員会が立案、実施した後、同委員会が審議のうえ決定したものをブックレットの対象としました。

研究所では、共同研究の成果を「紀要」、「叢書」として刊行していますが、人文科学の名で呼ばれる研究分野はあまりにも多岐であり、時に、研究チーム間の関係は疎遠になりがちです。日常の研究領域の枠を越える方へ我々を刺激してくれるこれら口頭による発表や報告も、研究所の重要な研究活動の一つと考えます。催しに出席できなかった研究員に、後日その内容を届けるのが目的ですが、同時に、口頭の発表であるために、おのずと専門語は敷衍され、読者は解説されたメッセージに直接ふれることになりますから、一研究所の中だけではなく、多くの方々にも親しく読んでいただけるものと信じています。

一九九三年五月二二日

中央大学人文科学研究所

クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』に隠された民話

―国際民話話型カタログＡＴＵでは何番にあたるのか？―

〈訳者前書き〉

この講演会は、中央大学人文科学研究所の研究チーム「幻想的存在の東西」が企画し、同研究所の主催で二〇二三年二月二五日（土）に、中央大学多摩キャンパスのFOREST GATEWAY CHUO・ホールで開催された。講演者のフィリップ・ヴァルテール（Philippe Walter）氏はフランス・グルノーブル＝アルプ大学名誉教授で、中央大学の二〇二二年度外国人研究者（第三群）として一週間、東京に滞在した。講演のタイトルは「クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』に隠された民話―国際民話話型カタログＡＴＵでは何番にあたるのか？―」（Un conte

caché dans le *Conte du Graal* de Chrétien de Troyes : quel numéro de code dans le catalogue international ATU ?）で、渡邉が逐次通訳と司会を担当した。ヴァルテール氏の来日は八年ぶり二十二回目で、中央大学での講演は今回が九回目である。

中世から現代までのヨーロッパの神話伝承やフォークロアに造詣が深いヴァルテール氏は、神話学的な立場からこれまで主として「アーサー王物語」に関する数多くの著作や学術論文を発表してきた。なかでも二〇一四年にパリのイマゴ（Imago）出版から原著が刊行された『アーサー王神話事典』（*Dictionnaire de mythologie arthurienne*）は、ヴァルテール氏の長年にわたる研究の集大成である（日本語版は渡邉浩司・渡邉裕美子訳『アーサー王神話大事典』原書房、二〇一八年）。

講演で取り上げられた『グラアルの物語』は、中世フランス語による「アーサー王物語」の実質的な創始者であるクレティアン・ド・トロワの遺作にあたり、「聖杯伝説」の出発点となった記念碑的な作品である。未完に終わったこの作品には、二人の主人公ペルスヴァル（英語名パーシヴァル）とゴーヴァン（英語名ガウェイン）が登場し、それぞれの冒険が作品の前半と後半で語られている。ヴァルテール氏はこの二人の神話的諸相について、イマゴ出版から刊行された二冊の研究書の中で詳しく分析している。興味を持たれた方は、『ペルスヴァル、漁夫とグラアル』

(*Perceval, le Pêcheur et le Graal*)（二〇〇四年）と『太陽騎士ゴーヴァン』(*Gauvain le chevalier solaire*)（二〇一三年）と、この二冊について中央大学の『仏語仏文学研究』第三七号（二〇〇五年三月）と第四七号（二〇一五年二月）に掲載していただいた私の書評を参照していただきたい。

今回の講演の内容をきちんと理解していただくため、まずは『グラアルの物語』で語られているペルスヴァルの冒険について、簡単に振り返っておくことにしよう。

『グラアルの物語』は、夫と二人の息子を亡くした母親に「荒れ森」で育てられた少年ペルスヴァルが、森で数人の騎士に出会ったのを機に騎士になりたいと考え、アーサー王宮廷に向かう場面から始まる。宮廷に到着し、アーサー王の盃を奪った「赤鎧の騎士」を倒してその鎧を手に入れたペルスヴァルは、ゴルヌマン・ド・ゴオールのもとで騎士道を学んだ後、麗しのブランシュフルールを敵から守る。

母のことを気にかけながら騎行を続けていたペルスヴァルは、舟に乗って川で釣りをする人物と出会い、その館で食事を振る舞われる。食事中のペルスヴァルの目の前を、先端から血の滴る「槍」、光り輝く黄金製の「グラアル」、銀製の「肉切台」を運ぶ人々が通過する。ペルスヴァル

は謎めいた品々についての質問を控えたが、翌朝目が覚めると館は無人になっていた。館を離れたペルスヴァルは道中で出会った従姉から、先の館で彼をもてなしたのは漁夫王だったことを知らされ、質問を控えたことを非難される。漁夫王は、ある戦いで怪我を負ってから体の自由が利かなくなり、同時に彼の王国も荒廃していた。もしペルスヴァルが「グラアル」と「槍」についての質問をしていれば、漁夫王の怪我が癒え、王国に繁栄が戻っていたと従姉から教えられる。

この間、ペルスヴァルの武勇を聞いたアーサー王は彼との再会を望み、一行を引き連れて彼を探しに出ていた。再会後、アーサー王の宮廷での祝宴に現れた醜い乙女から、漁夫王の館での振舞いを詰られたペルスヴァルは、「グラアル」の探索に向けて出立する。その後、物語ではアーサー王の甥ゴーヴァンの冒険が語られているが、未完に終わっている。この後半部分に、ペルスヴァルのその後が語られた約三〇〇行の短いエピソードが含まれている。

以後「グラアル」の探索に出たペルスヴァルは、神を忘れて遍歴を重ねるが、五年目の聖金曜日に森の中で偶然、伯父にあたる隠者と出会い、一族の秘密の一端を明かされる。伯父によると、「グラアル」で給仕を受けていた館の老王と隠者は兄弟で、ペルスヴァルの母は隠者の妹、漁夫王は老王の息子だという。さらに「グラアル」という皿で運ばれていたのは（カワカマス、ヤツメウナギ、鮭などの）魚ではなくホスティア（ミサで拝領する聖体のパン）のみで、霊的存在で

ある老王は十二年もの間（異本では十五年、または二十年）、ホスティアだけで生き長らえていると説明される。

『グラアルの物語』を伝える写本は、十五点現存している。このうち研究者の間で最も評価が高いフランス国立図書館フランス語写本一二五七六番写本（通称T写本）は、ゴーヴァンの冒険を語りながら九二三四行で中断しており、残念ながらペルスヴァルについてこれ以上の情報をもたらしてはくれない。今回のヴァルテール氏の講演では、『グラアルの物語』のうちペルスヴァルが登場する部分に焦点を当て、その語りの構造に注目しながら、作品に隠された「民話（コント）」の解明を試みている。

ジャン・フラピエの『聖杯の神話』（天沢退二郎訳、筑摩書房、一九九〇年）が総括しているように、従来の『グラアルの物語』の解釈では、ペルスヴァルが漁夫王の館で目撃した「グラアル」という物体に焦点が当てられてきた。しかしヴァルテール氏は、作品全体の骨組みを知ることこそが作品の真の理解につながると説く。この分析を通じて、ペルスヴァルに母親、ゴルヌマン・ド・ゴオール、伯父にあたる隠者が順に与える一連の忠告が非常に重要であることが明らかになっている。

クレティアンは物語のプロローグで、パトロンにあたるフランドル伯フィリップ・ダルザスから授けられた「書物」に記されている「民話（コント）」を、韻文で語ってみると述べている。ヴァルテール氏によると、この民話は国際民話話型ＡＴＵ九一〇Ｂ「主人の教えを守る」のタイプに属するものだという。講演ではこのタイプに属するロシア民話「よい言葉」や、中世ラテン語による『アーサーとゴルラゴン』を比較項として挙げ、『グラアルの物語』に隠された民話の謎を見事に解明していった。ちなみに国際民話話型につけられているＡＴＵは、世界中の民話の分類に貢献した三人の学者アールネ（Aarne）、トンプソン（Thompson）、ウター（Uther）の頭文字である。アールネとトンプソンによる国際民話話型カタログの増補・改訂版を二〇〇四年に刊行した著名な説話研究者が、ハンス＝イェルク・ウター氏である。なおこのカタログの加藤耕義氏による邦訳（『国際昔話話型カタログ　分類と文献目録』小澤昔ばなし研究所、二〇一六年）は、二〇一一年に刊行された第二版を底本としている。

ヴァルテール氏は、一九九九年九月八日に開催された中央大学での最初の公開講演会で『グラアルの物語』の漁夫王に注目し、クレティアン・ド・トロワが依拠した民話の古いバージョンでは、漁夫王に対応する人物が「魚の王様」であり下半身が魚の姿かもしれず、なおかつ変身能力を備えていたのではないかという斬新な解釈を提示されていた。そして今回の講演では、ロシア

騎行中のペルスヴァル
（フランス・イゼール県、
テッス城の「大広間」の壁画より）
© P. Avavian, Theys Patrimoine

民話「よい言葉」に出てくるゴルヴィリという魚の分析を傍証とし、二十四年前の説に自ら裏づけを行っている。

『グラアルの物語』の「ペルスヴァルの冒険」の骨格が国際民話話型ATU九一〇Bに相当することは、ヴァルテール氏による最新の「発見」であるが、もう一つ重要な「発見」が二十世紀末にもあった。実はフランス・ドーフィネ地方の中心都市グルノーブルの北東に位置するテッス村の城内壁画が、ヴァルテール氏の解読作業により、「ペルスヴァルの冒険」を描いたものであること

が判明したのである。十三世紀後半から十四世紀前半にかけて制作されたと推測されるこの壁画は、中世期の数多くの写本挿絵や一四世紀前半にパリで制作された象牙製の小箱の表面に描かれた図像と並び、『グラアルの物語』の「ペルスヴァルの冒険」を描いた貴重な図像資料である。詳しくは拙稿「テッス城（フランス・イゼール県）の壁面に描かれたペルスヴァルの幼少年期」（渡邉浩司編著『アーサー王伝説研究　中世から現代まで』中央大学出版部、二〇一九年、所収）を参照していただきたい。

最後に、訳文に頻出する「グラアル」と「民話」という二つの言葉について注意しておきたい。この講演で分析対象となった作品は、『ペルスヴァルまたは聖杯の物語』という邦題で知られており、今年一月二十五日に亡くなられた天沢退二郎氏による邦訳がある（『フランス中世文学集二』白水社、一九九一年、所収）。しかし作中に出てくる問題の容器は、キリストの聖血を含む「聖杯」ではないため、ここでは中世フランス語の原語のまま「グラアル」（graal）とした。また国際民話話型の文脈で話題になるフランス語の「コント」（conte）はドイツ語の「メルヒェン」（Märchen）に相当し、口承文芸の専門家であれば「昔話」という訳語をあてるかもしれない。しかしヴァルテール氏が講演中に「コント」を英語の「フォークテイル」（folktale）に相当すると示されたことから、ここでは暫定的に「民話」という訳語をあてることにした。なお以下の訳

文中、［　］を挟んで補った注は、訳者が付け加えたものである。

この講演会には、中央大学の教員や学生、人文科学研究所のメンバーのほか、ハンス＝イェルク・ウター氏のもとで学ばれた間宮史子氏と加藤耕義氏、国際アーサー王学会日本支部および日本ケルト学会の会員にも参加していただいた。ロシア民話「よい言葉」に出てくるゴルヴィリという魚について詳しく調べて下さった中堀正洋氏と伊賀上菜穂氏、中世ウェールズ語についてご教示下さった森野聡子氏には、心より感謝申し上げたい。さらには「日仏学者交換プログラム」の枠内でヴァルテール氏の来日を実現して下さった公益財団日仏会館の皆さま、講演会の準備にご協力下さった中央大学の研究所合同事務室と国際センターの皆さまにも、この場を借りて深甚なる謝意を捧げたい。

「幻想的存在の東西」研究チーム主査
渡邉浩司

はじめに

『グラアルの物語』(*Conte du Graal*)[注1]の謎を解く鍵は、「グラアル」(graal)という物体そのもの(さらには、きちんと判明しているその性質や起源)ではなく、「グラアル」が登場する場面の「前」と「後」、まさしく「グラアル」が一切出てこないエピソード群全体にある。こうした立場を取ると、「グラアル」の登場する約三〇行から九二三四行を数える物語全体を説明しようとする数多くの研究とは逆の方向に進むことになる。しかし(十分な根拠のない)これまでの数多くの研究こそ、必ず解釈の失敗に至る道筋だと言えよう。

新たな解釈を提案するにあたり、批評の方針を変えなければならない。これからは「グラアル」を作品の中心とみなすのではなく、物語論(語りの技術と構造についての研究)に立ち戻って考える必要がある。つまり、作品全体に目を向け、『グラアルの物語』の(冒頭から結末までの)「語りの内部構造」を再検討すべきなのである。これは「グラアル」のエピソードを、もっと大きな語りの枠組みと「グラアル」のエピソードを包みこむ「民話(コント)」の構造の中に置き直すことに他ならない。クレティアン・ド・トロワが自分の作品を「民話(コント)」と呼んでいるからである。

したがってここでは、『グラアルの物語』というテクストの考古学に取り組んでみようと思う。

それはつまり、クレティアン・ド・トロワの作品（およびその典拠）の背後に隠された、「グラアル」のエピソードと他のすべてのエピソードを含む「民話（コント）」を突き止める試みである。（作品全体に）隠されている形式上の構造、すなわち（「グラアル」という物体を含む）『グラアルの物語』という作品全体を作りあげている鋳型を明らかにしたい。

一・史的および文献学的観点から明確なこと

（一）「グラアル」は皿である。クレティアン・ド・トロワは（一一七九年から一一八一年にかけて著した）『グラアルの物語』の中で、「グラアル」を「ホスティア［ミサで拝領する聖体のパン］が入れられている皿」だと説明している。この「グラアル」を「血の滴る槍」および「肉切台（タイヨワール）」と関連づけ、「グラアル」に歴史上初めて特別な役割を与えたのが、他の誰でもないクレティアンである。このように「グラアル」はきちんと定義されており、「グラアル」の「謎」は存在しない。[注2]

（二）『グラアルの物語』は「民話（コント）」である。「グラアル」についての「民話（コント）」を韻文で書き直したという、クレティアンの主張を重視しなければならない。物語のもとになった民話は、フラ

ンドル伯フィリップ・ダルザスがクレティアンに委ねた（ラテン語による）「書物」の中に記されていたものである。つまり、ストーリーはクレティアンによって考え出されたわけではなく、クレティアン以前にできあがっていたものであり、クレティアンがそれを「民話（コント）」と呼んだのである。

クレティアン以前に「聖なるグラアル（＝聖杯）」についてのキリスト教的な伝承が存在し、それがクレティアンに着想を与えたという仮説が（一度も立証されることなく）かつて広まっていたが、今では否定されている。簡潔に言うなら「『グラアル』―言うまでもなくグラアル全般のこと―とは、キリストの血を受けた盃である」という仮説が、西ヨーロッパ中に広まっていた。しかしこの「仮説」は、『グラアルの物語』には当てはまらない（この説が当てはまるのは、クレティアン・ド・トロワ以降の十三世紀に書き継がれたいくつかの作品群である）。そもそも「グラアル」＝「聖盃」という仮説は十九世紀に出され、その後、長きにわたって批判されてきた。この「フェイクニュース」を広めた中世文学研究者ポーラン・パリス［一八〇〇～一八八一年］は、ロベール・ド・ボロンが「グラアル」の物語を最初に書いたと信じていた（しかし最初の「グラアル」の物語に実際に出てくるのは皿であり、キリストの血を受けた盃ではない）。

ロベール・ド・ボロンが「グラアル」の由来を著したのは一二〇〇年頃（つまりクレティアン・ド・トロワから二十年後）であり、作品のタイトルは『グラアル由来の物語』だった［邦訳は、横山安由美訳『聖杯由来の物語』（松原秀一・天沢退二郎・原野昇編訳『フランス中世文学名作選』（白水社、二〇一三年）所収］。ロベール・ド・ボロンはこの作品の中で、「グラアル」の来歴はキリストの時代まで遡り、（クレティアン・ド・トロワが言及した）「グラアル」は、キリストが地上での最後の晩餐で使った皿と同じものだと説明している。しかしキリストの時代に「グラアル」という言葉がなかった（ギリシア語、ラテン語、アラム語、ヘブライ語など、どの言語にも見つからない）ことから、こうした系譜を考え出したのはロベール・ド・ボロンなのだと考えられる。[注3]

こうしたキリスト教起源説とともに、「ケルト」起源説も否定が可能である。（ロジャー＝シャーマン・ルーミス［一八八七～一九一六年］のような）アーサー王物語の専門家の他にも、（ジャン・マルカル［本名ジャック・ベルトラン、一九二八～二〇〇八年］のような）一般向けの本を数多く手掛けてきた批評家が提唱した「オベリクス」説によると、（［漫画『アステリクスの冒険』に出てくる］オベリクスが持っている魔法の大釜のような）魔法の物体を中心に展開する「ケルト神話」があり、それにより「グラアル」の神話が説明できるのだという。しかしこの仮

説にはまったく根拠がない。紀元前五〜六世紀頃の物体が、その十八世紀後の中世の時代になって突如、物語作家たちの想像力の中に再び姿を見せた経緯を、何一つ説明できないからである。果たしてどのような文献を介し、どのような伝達手段で伝わったというのだろうか？[注4]

以上のことから、クレティアンの作品に立ち戻り、その構造を詳しく検討する必要がある。

二・『グラアルの物語』の形態学[注5]

主人公の少年ペルスヴァルは、母と一緒に暮らしていた森で騎士たちに出会う。そこで自分も騎士になりたいと思い、家を離れることにする。母は取り急ぎ息子に、助けを必要とする女性、立派な人々、神についての忠告を与える（第一シリーズの忠告）。ペルスヴァルはその後に続く冒険で、母の忠告をうまくいかせず、滑稽でばか正直な姿をさらけ出してしまう。

旅の途中でペルスヴァルは偶然、智勇すぐれた騎士（ゴルヌマン・ド・ゴオール）のもとに立ち寄る。ゴルヌマンはペルスヴァルに武具の使い方を教えようとしたが、生まれながらに騎手および戦士としての素養があったためその必要がなかった。そこでゴルヌマンはペルスヴァルを騎士に叙任することに決める。同時に、逆境にある女性を助け、教会へ行って神に祈りを捧げ、喋

りすぎないように、という一連の忠告を与えた（第二シリーズの忠告）。

ペルスヴァルは、敵に攻囲されていた姫君［ブランシュフルール］を助ける。（姫君は結婚を望んでいたが）ペルスヴァルはそのまま、「それ以上」のことをせずに出立してしまう。その後、漁夫王の館に到着したペルスヴァルは、王から食事に招かれる。食事中、驚くべき場面に遭遇し、目の前を光輝く「グラアル（皿）」と血の滴る「槍」が通り過ぎていったが、ペルスヴァルは口を閉ざしたままだった。翌日、城を離れたペルスヴァルは従姉の女性に出会い、「グラアル」と「槍」を見たにもかかわらず沈黙していたことを咎められる。さらには、ペルスヴァルの母が亡くなったこと、［「グラアル」と「槍」について質問しなかったため］漁夫王の怪我を治す機会を逸したことを伝えられる。この従姉から名前を尋ねられたペルスヴァルは、「それまで知らなかった」自分の名前を言い当てる。その後、［「グラアル」を探す旅に出て］記憶を失ったままさまよい続けたペルスヴァルは、ある日のこと、伯父の隠者が住む庵に偶然たどり着く。それは復活祭の二日前のことだった。ペルスヴァルはそこで伯父から最後の忠告を与えられ、ついにはキリスト教徒になる（第三シリーズの忠告）。物語の後半ではゴーヴァンの冒険が語られているが、ゴーヴァンは決して神に祈りを捧げないなど、隠者がペルスヴァルに授けた忠告に反する振舞いばかりする。

「作品の構造についての結論」『グラアルの物語』という作品の中心にあるのは、「グラアル」ではなくペルスヴァルへの忠告であり、これこそが作品の構造を示す唯一の真の鍵である。作品のタイトルは『グラアルの物語』だが、だからといって物語全体が「グラアル」を中心に展開していたり、物語全体が「グラアル」自体から派生していたりするわけではない。[注6]

物語に出てくる三つのシリーズの忠告はこれまで、あまりにも長きにわたり物語にとって副次的で取るに足りないものだと考えられてきた。教訓を与えるという口実でストーリーに追加されたものに過ぎないと思われてきたが、それは間違っている。実際には、一連の忠告こそが物語の真の中心で、語りを進めるための「動力」なのである。一連の忠告を、それに対応するエピソード群から切り離すことはできない（一連の忠告が次にくるエピソード群を予告しているからである）。したがって一連の忠告を、エピソード群自体の分析から切り離すことはできないのである。一連の忠告は作品の周辺にあるのではなく、まさしく物語の本質そのものであり、唯一の存在理由である。一連の忠告をなおざりにすれば、『グラアルの物語』は土台のない建物にすぎなくなってしまうのである。

三・作業仮説を立ててみる

『グラアルの物語』はまさしく「民話（コント）」である。フランドル伯フィリップ・ダルザスから授けられた「書物」に記された「民話（コント）」を「韻文で語ってみる」という、クレティアンの［プロローグでの］主張を重視しなければならない。クレティアンはその書物から単に「グラアル」という言葉だけでなく、皿（グラアル）とその他の品々のほか、一連の忠告が出てくる物語全体も受け継いでいる。しかも一連の忠告は、「グラアル」を含む品々や、主人公が経験する他の状況と関連している。また、クレティアンが書物を授けられたと告白していることから、クレティアンがこのストーリーを考え出したわけではないことが分かる。

作品の構造の鍵が一連の忠告であることから、次のような問いを立ててみよう。（『グラアルの物語』のように）主人公に与えられる一連の忠告が物語の構造を作り、さらに物語のある時点で奇妙な出来事が起きる不思議な住まい（「異界」）が舞台となるような民話は果たして存在するのだろうか？　一連の忠告が物語の骨格をなすような民話は存在するのだろうか？　こうした民話は実在しており、国際民話話型カタログの九一〇Bがこれに相当する。

国際民話話型九一〇B（ATU）「主人の教えを守る」[注7]

家族を養えなくなった貧しい男が、金持ちの農夫に一年間一定額のお金で雇われる。奉公が終了したあと、農夫は約束した賃金をもらうか、それともいい教えをもらうかを貧しい男に選ばせる。男は教えを選ぶ。

「いつも本道を行け」

「他人事に干渉するな」

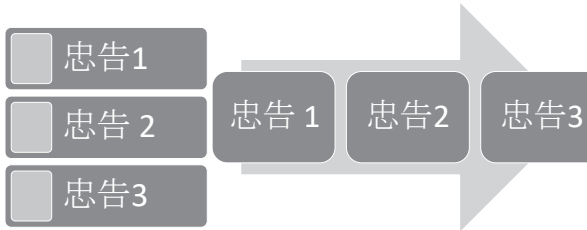
「怒るのは常に次の日に延期せよ」

これらが、よくある三つの教えである。家に戻る途中、

（一）道の分かれ目で、貧しい男は農夫の忠告に従い、新しい近道ではなく古い本道を行く。彼は、新しい道で泥棒たちが待ち伏せしていたかもしれないことを知る。

（二）夕暮れ時になり、貧しい男はある家に着き、そこで夜を過ごす。そこで貧しい男は奇妙な出来事を見るが、何もしない。貧しい男が出発しようとすると、その家の主人が貧しい男を呼び戻し、貧しい男の分別に対し大金を褒美としてくれる。

（三）最後に貧しい男が家の前に着くと、窓から見知らぬ男が妻にキスをしているのが見える。貧しい男はその男を殺したいと考えるが、幸いにもすぐ怒りを先延ばしにする。その見知らぬ男



範列軸　　連辞軸

図１　ATU910B型の民話

は、成長した自分の息子であった。

貧しい男は、無事に家族とまた一緒になることができて喜ぶ。

以上が国際民話話型九一〇B型のおおよその筋書きであり、世界中に多くの類話がある（ある比較研究は、五十五か国で集めた二六八以上の類話を検討している）[注8]。主人公に与えられる忠告の内容は類話ごとに（細部が）違うが、（与えられ、それが個々に物語化されていくという）忠告の構造全般は同じである。

この形式上の構造は、「先説法（プロレプス）」の手法によって定義が可能である。修辞学に由来するこの用語を提案したジェラール・ジュネット［フランスの文学理論家、一九三〇年～二〇一八年］によると、「先説法」はあるエピソードについてあらかじめ触れる語りの手法であり、「（ストーリー

が語られている時点で）後の出来事をあらかじめ語ったり喚起したりする語りの手法[注9]」である。初めに（あれやこれをしてはいけないといった）抽象的な忠告が与えられ、それから順に主人公が守るべきそれぞれの忠告を例証するエピソードが語られていく。一連の忠告はこのように、後に展開する物語の枠組み（概要）を提供している。そして忠告を物語化した個々のエピソードが、与えられた忠告の妥当性を証明している（なぜなら主人公は忠告をいかしたり、いかせなかったりするからである）。その後、一連の忠告が個々のエピソードによって順に取り上げられ、この民話は幕となる。言語学的に見れば、このタイプの民話は物語の連辞軸上に一連の忠告の範列軸を映し出したものだと定義できるだろう（図1）。

四・「グラアル」のエピソードを、一連の忠告が作っている語りの構造の中に置き直してみる

まずは 第二シリーズの忠告から検討してみよう。ゴルヌマンはペルスヴァルに喋りすぎないよう忠告しているため、「決して喋ってはいけない」と忠告される九一〇B型の一般的な図式とは、わずかな違いが認められる（［スティス・トンプソン『民間文芸のモティーフ・インデックス』によると］モティーフJ二一・六 「不思議な事柄について質問してはいけない」）。このように、

クレティアンは伝統に対してわずかに距離を置いているが、物語の語り手は与えられた忠告をペルスヴァルが守っていないと三度繰り返し述べている。[注10] ここで重要なのは、エピソード全体を形づくっている、守るべき忠告という不変の図式である。

「『グラアルの物語』の文脈」　ペルスヴァルは旅の途中で川のほとりにたどり着き、川を渡ろうとするが橋も浅瀬も見つからずにいた。その時、舟に乗って魚釣りをする男性の姿を見かける（魚の重要性に注意しよう）。この男性はペルスヴァルに食事と宿泊場所の提供を申し出る。やがてペルスヴァルはその男性の足が不自由で、歩くことができないことに気がつく。その男性の館での食事中に、不思議な出来事が起こり、「グラアル（皿）」からまばゆい光が発せられ、「槍」の先から血が滴る。この場面に登場する品々について知っておくべきなのは、「グラアル」、「肉切台（タイヨワール）」、「槍」がそれぞれ金、銀、鉄でできていることである。

「グラアル」は黄金製である。

「前を行くグラアルは、純粋な黄金でできていた」（Li graax qui aloit devant, / De fin or esméré estoit）（第三二三二～第三二三三行）

「肉切台」は銀製である。

「銀の肉切台（un tailleor d'argent,）（第三二三二行）

白い「槍」の穂先は白い鉄製である。

「白い槍、白い鉄の穂尖を見、一滴の血が槍の先端の刃尖から出てきて」（La lance blanche et le fer blanc. / S'issoit une gote de sanc / Del fer de la lance au somet.）（第三一九七～三一九九行）

ペルスヴァルは（喋りすぎないようにという）師匠の忠告を守って口を閉ざし、食後に寝床へ向かう。翌日になって質問をしようとしたが、もはや人影一つ見当たらず（人々も品々も）すべて消え去っていた。

一連の忠告が出てくる他の民話と照らし合わせた場合、この「グラアル」のエピソードはどのように解釈できるのだろうか？

そのためには、世界中の類話との比較が必要である。関連しあうよく似たモティーフの束ができるだけ多く出てくる「一連の忠告を含む民話」を、（何とかして）探し出さなければならない。ただし、その民話に以下の一連の要素が含まれている必要がある。

いくつかの忠告をもらった主人公が、水域にたどり着く。かなり変わった人物が主人公を自分の住む場所に招く。その場所は明らかに「異界」である。主人公が（金属と関連のあ

る）品々について質問される（あるいは主人公が質問をしなければならない）。その返答に応じて、主人公は報われたり、罰せられたりする。

五・国際民話話型ＡＴＵによる比較の方法

ある研究で、九一〇Ｂ型に属する二六八の類話の国際比較が詳細に行われている。類話のそれぞれのストーリーは千年以上の来歴を持つことが多く（九一〇Ｂ型の民話のうち、書き留められた最古の版は一〇七〇年のラテン語版である）、類話は各地に伝播する際（地域、言語、時代ごとに）次々と翻案されて形を変えているが、構造上それと見て分かる不変の要素がいくつか残されている（たとえば先説法は、九一〇Ｂ型の構造から見て不変の要素の一つである）。これらの類話のうち、クレティアンの作品に直接由来するものは一つもない。そう考えるにはあまりにも違いが大きいからである。しかしまた同時に、類話に『グラアルの物語』との類似がかなり多く見られることから、その類似が単なる偶然の産物だとも言えないだろう。したがって、もとになる版は同じであり、その来歴は実に古いものだと考えられる。つまり、それぞれの類話に『グラアルの物語』が依拠した古い典拠の一部が含まれていると考えられるのである。類話のそれぞ

れに含まれていると推察される一連のモティーフは、『グラアルの物語』を理解するために役立ち、『グラアルの物語』に見られるいくつかのモティーフの体系的（組織的）な構造を明らかにしてくれる。ただし、それらのモティーフができる限りしっかりとした構造を持ち、文脈の中でできる限り相互に関連しあっていることが条件となる。

アファナーシエフ［ロシアの民俗学者、一八二六～一八七一年］が集めたロシア民話の中に、九一〇B型の類話が存在するが、その骨組みは次のとおりである。

（一）若者が複数の忠告をもらい、

（二）海へと旅立ち、

（三）不思議な体をした存在（魚）に招かれる。（その存在が住む海底の）住まいで、若者は、

（四）まさしく金属に関する質問をされる（『グラアルの物語』のペルスヴァルは、金属製の品々について質問をするよう促される）

（五）若者にはその後、驚くべき宝が授けられる（ペルスヴァルは最初こうした幸運を逃してしまうが、隠者から第三シリーズの忠告を受け取ってそれを守ることで、何にもかえがたい褒美として隠者から秘密の神名を教えてもらう）。

アファナーシエフのロシア民話「よい言葉」[注11]

商人だった父が亡くなり（ペルスヴァルの父も、戦争で負った怪我のせいで亡くなっている）、あとに残されたイワンという名の息子は、仕事を探すために家を出る（ペルスヴァルは騎士になるため、母のもとを離れる）。

［ある商人の娘と結婚した］イワンは、妻が刺繍した絨毯を二つ売って、［客の老人からお金の代わりに］二つの忠告を順にもらう。一つ目は「死を恐れるな」、二つ目は「首斬る前に起こしてたずねろ」だった。二つの忠告をもらったイワンは、商売のために海へ向かう叔父たちと一緒に出かける。

海上を進んでいた時、突然水の中からゴルブィリという名の魚が現れる。魚はイワンの叔父たちに、裁きの女神の悩み事を解決してくれるロシア人を連れてくるように頼む。そして用が済めば、その人をきっと送り返すと言う。

叔父たちから頼まれたイワンは、老人からもらった「死を恐れるな」という一つ目の忠告を思い出す。そこでイワンはゴルブィリとともに海の中へ入り、海底にたどり着く。そこにいた裁きの女神は、金と銀と銅のうち一番大切なものは何かと考えていた。この謎を解決してくれたら褒美をあげようと、女神はイワンに言う。

そこでイワンは、こう答える。「一番大切なのは銅です。銅がなければ、お金の勘定ができなくなるからです。銅貨には一コペイカもあれば半コペイカもあり、さらに四分の一コペイカもあり、たくさん集めれば一ルーブリにすることもできます。それに対して、銀貨や金貨は細かくするわけにはいきません」。ゴルブィリに導かれてイワンが船に戻ると、イワンの船には宝石がぎっしりつまっていた。

その後も商売を続けたイワンは、たくさんの富を手にし［二十年後に］自宅に戻る。［妻がベッドで二人の若者と横になっているのを見かけたイワンは激怒するが］老人からもらった「首斬る前に起こしてたずねろ」という二つ目の忠告を思い出し、自分の［双子の］息子たちの命を奪わずにすんだという。

六・「グラアル」のエピソードと共通する諸要素

（一）複数の忠告がイワンの冒険を導いている。最初のエピソードでは、（「死を恐れるな」という）忠告を思い出したイワンは、魚とともに海の中へ入ることにする。

（二）冒険の舞台は、海底の不思議な国である。イワンは魚に導かれて、裁きの女神のもとへ

向かう。これに対してペルスヴァルは、「谷間に」（第三〇三二行）[注12]あった館へ向かう（「谷間（アヴァル）に」あったこの館は、海のかなたにあるアヴァロンの国［「リンゴ畑」を意味する、妖精モルガーヌが支配する国］と響きあっている）。漁夫王の館は地上にあるが、海のかなたの国を匂わせるところがある。

（三）案内役が魚（ロシア語では「大きな頭」を指す「ゴルヴィリ」）なのは、漁夫王がペルスヴァルを館に招くことと対応している。漁夫王は両脚が不自由なため、民話の古いバージョンでは魚の王様[注13]だったのではないかという仮説を、私は（一九九九年九月八日に中央大学で行った講演[注14]で）披露した。漁夫王が水の精、魚の王様だとすれば、そもそも足がなかったのかもしれない。中世期の美術（絵画や版画）には、中世の想像世界（イマジネール）で人気のあったこうした生き物の実例がいくつも見つかる[注15]。ロシア民話「よい言葉」は、漁夫王がもともと魚の王様だったのではないかという私の説の最初の裏づけになるだろう。

（四）このロシア民話のエピソードで最も興味深いシークエンスはもちろん、イワンが海底に行き、裁きの女神から三つの金属について尋ねられる件である。鉄が銅に置き換わっていることを別にすれば、ペルスヴァルが目撃する三組の金属と同じである。ロシア民話では『グラアルの物語』のモティーフが反転し、裁きの女神のほうがイワンに金属について尋ねている。ペルス

ヴァルの話では逆に、黄金製の「グラアル」と鉄製の「槍」について、ペルスヴァルが尋ねなければならなかった（質問をする側とされる側が逆転している）。ちなみに「鉄は黄金より貴重」というテーマで書かれたＡＴＵ六七七型の民話[注16]もある。この型の物語は独立していたり、一連の忠告を含む民話と組み合わされたりしている（すなわち九一〇Ｂ型の地域的バリエーションである）。さらに、九つの類話のうち四つがフィンランド、五つがロシアで見つかっていることから、六七七型の民話はフィンランド＝ロシア圏に特有のものであるように思われる。

金、銀、鉄という分類は、それぞれの金属でできた三つの品が担う象徴の重要性を反映したものであり、研究者たちから無視されることの多かった「肉切台（タイヨワール）」に改めて重要な役割を与えている。三つの品のうち「グラアル」が最も重視されてきたが、この際、思い切って見直す必要がある。なぜなら、ただちに注意を引くのは「血の滴る槍」の鉄だからである（物語では「グラアル」と「肉切台」よりも前に出てくる）。六七七型に分類される民話（実際には九一〇Ｂの地域的バージョン）で語られる伝承を考慮すれば、ペルスヴァルは「グラアル（皿）」が発するメッセージよりも、「血の滴る槍」の鉄が発するメッセージについて思いをめぐらすよう求められているという結論に至るはずである。

ここで、謎めいた「鉄のハンス」（ＫＨＭ［グリム『子供と家庭の童話集』］一三六）との比較

をすべきだろう。体が錆びた鉄のように茶色いハンスは、沼の中から引き上げられた山男で、森に金や銀をあり余るほど持っていた。[注17] ハンスは沼の水から手を出して人やものをつかんでいるが、これはアーサー王の治世の最後に湖水から突如出てきて王の剣［古フランス語名エスカリボール、英語名エクスカリバー］を握り、水の中に消える不思議な腕に似ている。さらにまた、銅が水底にあるという話は、北太平洋の諸民族の神話によく見られる。[注18]

漁夫王は姿を消すことのできる不思議な力を持っているため、間違いなく不可思議な人物の仲間である。しかし、伝説や神話から見ると、これは何を意味しているのだろうか？　まず漁夫王は、（突如ペルスヴァルの前に現れたり、姿を消したりすることから）変身能力を備えた人物である。おそらく、古代ギリシアで「海の老人」（たとえば『オデュッセウス』に出てくるプロテウス）や、中世ウェールズで「ヒナイヴィオン・ビード」（「世界最古のもの」）と呼ばれる存在に相当すると思われる。[注19] こうした原初的な存在は、さまざまな動物の姿に変身する（ケルト文化圏では鮭が特に重要である）。

七・暗号化された名前―ゴルブィリまたはゴルブシャ[注20]

イワンを海底まで案内する魚（実はサケ科の魚）を指すロシア語「ゴルブィリ」は、何を指しているのだろうか。この「ゴルブィリ」はおそらく、裁きの女神と同一である（『グラアルの物語』でも、漁夫王と不思議な館の主人は同一人物である）。海底へ案内された人間は、その後も長くも生き続けるか否かを決められる。ここで連想されるのは、古代神話に出てくる冥界の裁きの神々[注21]、人間を石に変えてしまうゴルゴン［その目を見た者を石に化す三姉妹の怪物］、（『古事記』に出てくるワタツミのような）龍王が住む宮殿である。

「ゴルブィリ」（gorbyl'）または「ゴルブシャ」（gorboucha）（サケ科の魚[注22]を指す語であり、ロシア南部ではラスキリlaskir'と呼ばれる）[注23]に含まれる「ゴル」（gor-）という音節に注目すれば、海底に住み人間の言葉を話せるこの不思議な生き物について、言語学的な解読[注24]を行うことができる。『グラアルの物語』に登場するゴルヌマン・ド・ゴオール（**Gor**nemant de **Goort**）という人物の名には、「ゴル」（gor-）という音節が二つある。ゴルヌマンの名前はさらに、彼の住む城がどこにあるかを説明する「湾、小さな入江」を指す「ルゴール」（regort、第一三二四行）と、釣り場[注25]を指す専門用語「ゴール」（gort、第一三三二行）という二つの言葉に引き継がれている

（さらにゴールGoortの意味を説明している）。このように、物語中の別のエピソードと漁夫王には秘かな繋がりがあり、ゴルヌマン（嘘をつかない人）がペルスヴァルに「喋りすぎないように」という決定的な忠告を前もって与えている点で重要である［ゴルヌマンのヌマン-nementは、否定辞「ヌ」（ne）と「嘘をつく」を意味する動詞「マンティール」（mentir）の活用形「マン」（ment）の組み合わせである］。ペルスヴァルはこの忠告を文字どおりにとらえ、「グラアル」と「槍」を前にして「口をつぐんで」しまったが、きちんと質問していれば試練を成功させることができたのである。また、「ゴル」（gor-）という音節は、［十三世紀の中世ラテン語作品『アーサーとゴルラゴン』で］アーサー王が出会う人狼の名（ゴルラゴンGorlagon）にも含まれている。さらには、ランスロ［英語名ランスロット］が主役の物語に出てくる不思議な王国の名ゴール（Gorre）にも認められる。「ゴル」（gor-）というこの音節は、「貪り食うこと」や「喉」という意味を表すインド＝ヨーロッパ語の語根g^{w}er-1と関連づけて解釈する必要があるだろう。[注26]

このように考えれば、「ゴル」（gor-）という音節を含むこれらの名前の背後には、実に不思議な異界に住む「人食い鬼（オーグルogre）」が［「ゴル」（gor）のアナグラムとして］隠れているのだろうか？　民話の「人食い鬼」は異界の支配者であり、巨万の富を持っている（ＡＴＵ三二八「少年が人食い鬼の宝を盗む」を参照）。ちなみに［『グラアルの物語』後半でゴーヴァン

が探しに向かうことになる」「血の滴る槍」は、「かつて人食い鬼（オーグル）の土地だったローグル（Logres）王国全体」[注27]を破壊することになる槍だと記されている。

『グラアルの物語』と比較すると、十三世紀のアーサー王物語『アーサーとゴルラゴン』では、一連の忠告の構造が反転していることが分かる。この物語のアーサーは三人兄弟［ゴルゴル、ゴルレイル（またはトルレイル）、ゴルラゴン］を順に訪ね、それぞれに女性の心や本性について質問する（すなわちアーサーが、女性に対して取るべき振舞いについての忠告を求めていることを意味する）。三番目に応対した長兄（ゴルラゴン）だけが、アーサーの質問に答えることができた。[注28] アーサーが三人にした相談は、ペルスヴァルに三人の人物が順に忠告を与えた話の類例である。主人公に「忠告を与える」二人の名前（ゴルラゴンとゴルヌマン・ド・ゴオール）は、異なる作品の人物でありながら響きあっているように思われる。ゴルラゴンは漁夫王の名前の一つなのだろうか？　漁夫王の不可思議な姿と、ペルスヴァルを迎えた館から彼が突如姿を消していることが、こうした見方を後押ししているように思われる。[注29]

結論

以上のように国際民話話型九一〇B型から『グラアルの物語』の内部構造を明らかにする作業は、多くの点で興味深い。

（一）この作業によって明らかになった面白い点は、中世ヨーロッパの作品群の比較研究の枠組みを、いくつかの民話の話型へと広げられることである。民話の話型は、（ケルト文化圏やその他の）神話物語群よりも中世の物語群へ直接重ね合わせることのできる、まとまったモティーフ群のシークエンスを提供してくれるからである。確かに（ケルト文化圏やその他の）神話物語群は中世の物語群と似ているが、その類似はぼんやりとしたものであることが多く、似ていると認めづらい場合もある。[注30]

（二）国際民話話型に照らして複数の物語群の比較を行うと、物語群の要点をより正確に絞りこむことができる。しかし比較する際には、特定のモティーフ群が作りあげる筋書きを無視して、モティーフ群のほうを拡大解釈しないように注意する必要がある。語りの構造を明らかにすることのほうが、（「グラアル」に代表される）語りの構造の中の些細な細部に焦点を当てることよりも重要である。つまり比較という方法を取れば、そうしない限り意味が見えてこない作品の細部

に注意を向けることができる。こうした作品の細部は、互いに関連づけられたモティーフ群の構造において意味が明らかになるのである。

（三）国際民話話型九一〇B型から『グラアルの物語』を検討すると、その翻案作品（特にヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ作『パルチヴァール』［中高ドイツ語・韻文、一二〇〇年頃。邦訳は加倉井粛之・伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一訳、郁文堂、一九七四年］や中世ウェールズの『エヴロウグの息子ペレディルの物語』［邦訳は森野聡子訳『ウェールズ語原典訳マビノギオン』（原書房、二〇一九年）所収］、さらには『グラアルの物語』の『続編』群［『第一続編』（短編は一一九〇年頃）、『第二続編』（一二〇〇年頃）、マネシエ作『第三続編』（一二二〇年頃）、ジェルベール・ド・モントルイユ作『第四続編』（一二二七年頃）］や散文による聖杯物語群など）との関係を、より明確に定義し直すことができるはずである。九一〇B型の民話はいわば、これらすべての作品どうしのつながりの度合いを見極め、相互の影響関係をもっと詳しく検討するための基準だと言えるだろう。この作業はまだ、始まったばかりなのである。

注

注1　本稿で用いた校訂本は、プレイヤッド版『クレティアン・ド・トロワ全集』所収『グラアルの物語』である（Chrétien de Troyes, *Le Conte du Graal*, édition et traduction de D. Poirion, in : Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*（sous la direction de D. Poirion）, Paris, Gallimard, 1994, p. 683-911（texte et traduction）, p. 1299-1391（notes et commentaire））。

注2　J. Frappier, *Chrétien de Troyes et le mythe du graal. Étude sur Perceval ou le Conte du Graal*, Paris, SEDES, 1972.［邦訳はジャン・フラピエ（天沢退二郎訳）『聖杯の神話』筑摩書房、一九九〇年］ Ph. Walter, *Perceval, le Pêcheur et le Graal*, Paris, Imago, 2004.

注3　ジョルジュ・デュメジルは（一九二四年に刊行された博士論文『不死の饗宴』の中で）ロベール・ド・ボロン作『聖杯の物語』を「ウェールズ版」として紹介している（G. Dumézil, *Le festin d' immortalité*, 1924, p. 178）。このことから、デュメジルが古フランス語で書かれた原典を読んでいないことが分かる。デュメジルは自説を補強する際、ポーラン・パリスの著作（P. Paris, *Les romans de la Table ronde*, Paris, 1868）に記されていた作品群の不正確な梗概と間違った創作年代を根拠にしてしまっている。

注4　ケルト起源説とキリスト教起源説をめぐる議論については、オンライン版『イリス』第四二号に掲載されたフィリップ・ヴァルテールの論考（Ph. Walter,《Un graal et trois fonctions dumézilienne : illusion, falsification, déception》, *Iris*［revue en ligne］, 42, 2022, mis en ligne en janvier 2023. https://publications-prairial.fr/iris/index.php?id=2730）を参照。

注5　ここで用いた「形態学（モルフォロジー）」の概念は、プロップが（『民話の形態学』の中で）用いた概念

とは異なる「邦訳はウラジーミル・プロップ（北岡誠司・福田美智代訳）『昔話の形態学』白馬書房、一九八七年」。ここではプロップが用いた抽象的な論理素（「機能」）を使うのではなく、（レヴィ＝ストロースが『構造人類学二』で指摘しているように）「内容はその構造と」、典型的で（さらには文脈に適合した）モティーフ群の配列から「その本質を引き出す」ことに留意すべきだろう（Cf. C. Lévi-Strauss, *Anthropologie structurale deux*, Paris, Plon, 1996, p. 158）。ここで『グラアルの物語』の梗概が明らかにしようとしている「示差的な要素の束」（p. 170）は、民話に構造を与え、相互に入れ替え可能である（これは、後に物語化されてエピソードとなる、一連の助言が果たす範列の役割である）。

注6　クレティアンは、『荷車の騎士』や『ライオンを連れた騎士』を著した（タイトルの「荷車」と「ライオン」はどちらも、ランスロとイヴァンの冒険群の中心というわけではない。「荷車」、「ライオン」「グラアル」は三つの作品を区別するための標識だと考えられる）。

注7　H.-J. Uther, *The Types of International Folktales : A Classification and Bibliography Based on the System of Antti Aarne and Stith Thompson*, Academia Scientiarum Fennica, coll.《Folklore Fellow's Communications, 284》, Helsinki, 2004, t. 1, p. 530-531.［邦訳は、ハンス＝イェルク・ウター（加藤耕義訳）『国際昔話話型カタログ　分類と文献目録』小澤昔ばなし研究所、二〇一六年。ここでは加藤訳を参照し、文脈に合わせて訳語を一部変更させていただいた］

注8　J.-P. Pichette, *L'observance des conseils du maître. Monographie internationale du conte type AT 910B précédée d'une introduction au cycle des bons conseils（AT 910-915）*, Helsinki. Academia Scientiarum Fennica, 1991（coll.《Folklore Fellow Communications, 250》）.

注9　G. Genette, *Figures III*, Paris, Seuil, 1972, p. 105.［先説法（prolepse）については、ジェラール・ジュネット（花輪光・和泉涼一訳）『物語のディスクール　方法論の試み』書肆風の薔薇、一九八五年、七〇～八四頁を参照］

注10　「というのも、あの騎士が彼に与えた忠告を思い出したからだ」（Que del chasti li sovenoit / celui qui chevalier le fist）（第三二〇六～第三二〇七行）、「彼はあえて尋ねようとしなかった（中略）、心の中にあの賢い騎士の言葉があったからである」（N'osa mie demander […] el cuer avoit la parole au prodome）（第三二四四～第三二四七行）、「優しく教えてくれた、あの賢者のことが思い出されたからである」（Por le prodome se dotoit / qui dolcement le chastia）（第三二九四～第三二九五行）

注11　このロシア民話は、かつて多くのフィン人が住んでいた地域である（モスクワ南東一八五キロにあるリャザンにある）ラネンブルグ郡近郊で集められた。フランス語訳はAfanassiev, *Contes populaires russes*, 2010, Paris, Imago, tome 3, n°249, p. 211-213. J.-P. Pichette, *op. cit.*, p. 421-422（version RUS-2）.［邦訳は、中村喜和訳『アファナーシエフ民話集（下）』岩波文庫、三〇六～三一〇頁「よい言葉」］この話型に属するロシア民話の類話については、『東スラヴ民話のモティーフ・インデックス』（L. G. Barag（éd.）, I. P. Berezovskij, K. Kabashnikov, N. Novikov, *Sravnitel'nyj ukazatel'suzetov. Vostochno-slavjanskaja skazka* (Index comparatif des contes-types : contes des Slaves de l'Est), Leningrad, Naouka, 1979, p. 228）も参照。

注12　「すると彼の眼前の谷間に」（Lors vit devant lui an un val）（第三〇五〇行）という一節から、ペルスヴァル（Perceval）の名は「谷（ヴァルval）の秘密を見抜いた（ペルスperce）者」と解釈できる。

注13　Ph.Walter, 2004, *op. cit.*, p. 201-223. 魚人間は、ロマネスク期の絵画や彫刻（J. Fronty, *L'étrange bestiaire*

médiéval du Musée de Metz. Un poisson dans le plafond, Metz, Editions Serpenoise, 2007）だけでなく、アーサー王文学にも登場する。

注14 Ph. Walter,《Roi Pêcheur ou roi-saumon ? A propos d'un personnage du *Conte du Graal* de Chrétien de Troyes》（一九九九年九月八日に中央大学で開催された講演）。講演原稿はフィリップ・ヴァルテル（渡邉浩司訳）『漁夫王あるいは鮭の王？　クレチアン・ド・トロワ『聖杯の物語』の一登場人物をめぐって』（人文研ブックレット一二、二〇〇〇年）を参照。

注15 メッス［フランス北東部モゼル県］のセルプノワーズ通りの豪華な邸宅の装飾天井（一三世紀）や、リヨン［フランス南東部］のサン・ジャン（聖ヨハネ）大聖堂の正門に描かれた人間と魚の雑種像を参照。

注16 J.-P. Pichette, *op. cit.*, p. 539-540.

注17 「鉄のハンス」については、フィリップ・ヴァルテルの論考（Ph. Walter,《L'or, l'argent et le fer. Etiologie d'une fête médiévale : les Rogations》, *Le Moyen Age*, 99, 1993, p. 41-59）を参照。

注18 C. Lévi-Strauss, *La voie des masques*, Paris, Plon, 1979, p. 83-84.［邦訳は、クロード・レヴィ＝ストロース（山口昌男・渡辺守章・渡辺公三訳）『仮面の道』（ちくま学芸文庫、二〇一八年）第一部第二巻Ⅵを参照］

注19 Ch. Guyonvarc'h et F. Le Roux, *Les Druides*, Rennes, Ouest-France, 1986, p. 322-329.

注20 ゴルブシャというのは、北太平洋に棲息する背部が著しくもり上がったサケ科サケ属の魚［カラフトマス］である。

注21 イワンが水底（地下世界）に向かう件は、冥界での裁きという神話的なテーマを思い起こさせる。古代神話では、人間が死後に運命の神の裁きを受けることになっていて、その死者の魂の行く末が決められる。

たとえば古代エジプトでは、死者の魂の裁きはオシリスの前で行われる。古代エジプトの『死者の書』によると、死者は一連の儀礼的な文言を覚え、それを神々の前で朗誦して永遠の幸福を手に入れようとした。ロシア民話「よい言葉」では、裁きの女神の問いへの返答が重要であるため、前述の冥界の支配者による裁きの考え方と同じようなものだと思われる。『グラアルの物語』では、ペルスヴァルが漁夫王に「グラアル」と「槍」についての質問をしなければならないが、それ以外の質問には何の意味もない。つまり、漁夫王もまた生殺与奪の権を握る存在なのではないだろうか。漁夫王は、民間伝承では地獄との区別が判然としない彼岸の支配者なのかもしれない。そもそも九一〇B型の民話の標準形に従えば、（斬首や流血などの）不気味な儀礼を取り仕切る主人の前で失礼な発言をすれば、死を免れなかった（九一〇B型の民話には「死者の生首のある館」のエピソードを含むものがある）。ローマの民間信仰では、こうした恐るべき領域はオルクス（Orcus）と呼ばれていたが、かつてこの名称を「人食い鬼」を指す「オーグル」（ogre）と関連づける試みがなされた（オンライン版ヴァルトブルク『フランス語語源辞典』第七巻三九四頁では、オルクスが「地下世界」と解釈されている）。漁夫王の属性も、人食い鬼から受け継がれているのかもしれない。最後に地獄の場所であるが、たいていは海の彼方にあると考えられている（イワンは海底、ペルスヴァルは橋も浅瀬もない川を越えたところへ向かっている）。水辺の地獄というこのモティーフは、神話の想像世界（イマジネール）では極めて重要である（この点については、イヴ・ボンヌフォワ編『世界神話事典』所収「地獄の地誌」（*Dictionnaire des mythologies* d'Y. Bonnefoy (dir.), Paris, Flammarion, 1999, t. I, p. 674-678［邦訳は、金光仁三郎ほか訳『世界神話大事典』大修館書店、二〇〇一年、三五一～三五二頁］）を参照）。

注22

ケルト神話における鮭の重要性と、（鮭をまるごと一匹入れることのできる皿としての）「グラアル」につ

いては、フィリップ・ヴァルテールの著作（Ph. Walter, 2004, *op. cit.*, p. 181-200）を参照。

注23 Z. Prilepine, *Je viens de Russie. Chroniques*, Paris, Éditions de la Différence, 2014 の第七章冒頭を参照。「鮭」を指す「ラスキリ」（laskir）はスラヴ語であり、その語根が（音位転換を起こして）ドイツ語では「ラクス」（Lachs）となっている。

注24 同じ言語グループ（ここではインド＝ヨーロッパ語族）に属する神話群には、古い神話的基層を表す、よく似た音節を一つか複数含んだ、暗号化された名前や言葉が見つかる。暗号化された名前の分析例としては、デュメジル『神話と叙事詩』第三巻（G. Dumézil, *Mythe et épopée*, t. 3, p. 21-89）を参照（『リグ・ヴェーダ讃歌』に言及のある水神アパーム・ナパート、アイルランドの泉の神ネフタンが、ローマの水神ネプトゥーヌスと比較されている）。

注25 インターネット版『中期フランス語事典』の定義によると、「ゴール」（gort）は「川底に置かれた二列の棒で、その天辺に魚がくると網が閉じ、魚を中につかまえられるようになっている」。「グラアル」（魚を入れる大きな皿）と「血の滴る槍」を持つ漁夫王は、この仕掛けと関係のある人物だと思われる。

注26 *Proto-indo-european etymological Dictionary. A revised edition of J. Pokorny, Indogermanisches Etymologisches Wörterbuch*, Indo-European language revival association, 2007, p. 1304-1307（sur le site http://dnghu.org/）

注27 'Que toz li reaumes de Logres, / Qui jadis fu la terre as ogres,'（*Conte du Graal*, v. 6169 et 6170）. りの二行は、フランス語文献における「人食い鬼（オーグル）」という語の初出である。

注28 *Arthur et Gorlagon*, dans : *Arthur, Gauvain et Mériadoc. Récits arthuriens du XIIIe siècle*, traduits et

commentés sous la direction de Ph. Walter, Grenoble, Ellug, 2007（coll.《Moyen Âge européen》.［邦訳は高木麻由美・橋本万里子訳「アーサー王とゴーラゴン王」『立命館文学』第六一七号（二〇一〇年）、四七～六三頁］

注29　ゴルラゴンと漁夫王は、それぞれが象徴的に担う役割から比較可能である。ゴルラゴンが人狼、漁夫王の祖型が魚の王様だと想定できるからである。半ば人間で半ば動物のこうした人物は民話にもよく登場し、残忍で人肉を食らう人食い鬼のごとき存在である（そもそもゴルラゴンは、不倫に及んだ妻を罰するため、妻の愛人の首を刎ね、妻には食事のたびに皿にのせられた愛人の頭蓋骨に接吻するよう強要した）。九一〇B型の民話の数多くの類話に出てくる漁夫王に相当する人物もまた、惨忍な殺人鬼であり、凄惨な光景を前にして口を滑らせた人をことごとく殺めている。つまり、漁夫王もまた人食い鬼だと考えられる（これに対応するペローの童話の「青髭」は、まさしく連続殺人犯である）。九一〇B型の民話には、適切な振舞いを見せた客に的外れの返答をした場合、客を待ち受けていた報いを教えてくれる主人が出てくる類話もある。主人がある部屋の扉を開け、客は首を刎ねられた死体の山が床の上にあるのを目撃する（本ブックレット巻末の「補遺」に掲載された、九一〇B型に属するバスク民話「占い師の三つの忠告」を参照）。これは漁夫王がまさしく惨忍な人食い鬼である証拠である。また、クレティアン・ド・トロワとヴォルフラム・フォン・エッシェンバハはそれぞれ、漁夫王とその中高ドイツ語版にあたるアンフォルタスを、ローマ神話のサトゥルヌスのごとき人物として描いている（この点については、フィリップ・ヴァルテール「メランコリックな孤独―漁夫王とアンフォルタス」（Ph. Walter,《Solitudes mélancoliques : le roi Pêcheur (Chrétien de Troyes) et Amfortas (Wolfram von Eschenbach)》, dans : A. Siganos éd., *Solitudes écritures*

et représentations, Grenoble, ELLUG, 1995, p. 21-30）を参照）。サトゥルヌスの主な特徴は、自分の子供たちを貪り食うところにあったが、これほどの人食い鬼はなかなかいないだろう。サトゥルヌスが天文学書の版画で跛行の姿で描かれることが多いことから、漁夫王の不具も説明が可能である（サトゥルヌスに由来する土星は十六世紀の版画に描かれているように、冬のやぎ座とみずがめ座の支配星である）。このモティーフについては、アレクサンドル・ヴァルテールの修士論文『ペルスヴァルと土星の子たち』（A. Walter, *Perceval et les enfants de Saturne*, Grenoble, Université Stendhal, 2003（mémoire de maîtrise））を参照。

注30　数多くの例の中から一例を挙げておこう。（ロジャー・シャーマン・ルーミスは）グラアルを［アイルランドの神話物語に出てくる］ダグダの大釜と比較したが、この比較にはまったく意味がない。ケルト文化圏で重視すべきなのは、食べ物をのせる皿（グラアル）と肉を切り分けるための皿（タイヨワール）という二つの皿、特別な槍、以上三つの品に関する質問が揃って出てくる作品である。しかしこうした作品はこれまでに一度も、ケルト文化圏で見つかっていない。

補遺

「占い師の三つの忠告」（バスク民話）

運に見放された男が妻と子供たちのもとを離れ、運試しに出かける。出発前、男は占い師に見てもらい、三つの忠告をもらう。それは、（一）決して本道から離れて横道を進んではならない、（二）他人の家で何かを見たり聞いたりしても詮索してはならない、（三）怒りを覚えてもすぐには動かずに落ち着いてから恨みを晴らしなさい、という忠告だった。

（最初の忠告どおり）本道を進んだおかげで、男は泥棒と出会わずにすむ。ある晩、男は城に到着し、宿泊場所と食事を求める。館の主人は、頭が二つ、目が三つ、鋼の脚という身の毛もよだつ姿をしていた。しかし男は二つ目の忠告を守り、驚いた様子を少しも見せなかった。城主は食卓を置き、三人分の食器を並べる。しかしグラスを二つしか置かず、三つ目のグラスの代わりに人間の頭蓋骨を置く。それから城主が箪笥を開けると、そこから驚くほど美しい貴婦人が出てくる。貴婦人は頭蓋骨の前に座り、それをグラスとして使う。夕食後、貴婦人は箪笥に戻っていく。この光景が繰り広げられる間、男がずっと黙っていたため、城主はこう言った。「珍しいお方だな、そなたがずうずうしい奴だと非難する者は誰もおらん。そなたはここで見たものについ

て何一つ尋ねなかったが、そなたにとって幸いなことだった。好奇心に負けて尋ねていたら、そなたの前にここへ来た他の者たちと同じく、そなたは命を落としていたからだ」。その後、城主が男に見せた部屋の床には、死体の山があった。城主の話によると、先ほどの貴婦人は城主の妻であり、城主に不貞を働いたのだという。そこで城主は妻の愛人を殺し、その頭蓋骨を杯にした。城主は客の命を奪うことなく、客を帰した。

男は自宅に戻ったが、出発したときと変わらず貧しかった。ところが家では、妻が若い司祭と楽しそうに喋っていた。男は若者が妻の愛人だと思い、殺そうとするが、（三つ目の忠告どおり）怒りを抑え、その場は我慢した。実はその若い司祭が、家を出た時にほんの子供だった自分の息子だと判明する。男の妻は辛抱強く働き続け、家ではなんとかゆとりある暮らしができるようになっていた。つまり、占い師は正しかったのである。三つの忠告のおかげで、この家族は貧困から抜け出すことができたのだった。

ジャン＝フランソワ・セルカン編『バスク地方の伝説と民話』より

Philippe Walter（フィリップ・ヴァルテール）

1952年、フランス・モゼル県メッス生まれ。グルノーブル第３大学（現グルノーブル＝アルプ大学）名誉教授。1999年から2013年まで同大学イマジネール研究所所長。文学博士。専攻は中世フランス文学・比較神話学。中世から現代までのヨーロッパの神話伝承・フォークロアに通じ、神話学的アプローチに基づいた研究成果を精力的に発表している。特に「アーサー王物語」関連の著作が多く、中世フランスの文学作品の校訂や現代フランス語訳も数多く手掛けている。ガリマール出版のプレイヤッド叢書では、『クレティアン・ド・トロワ全集』（1994年）で『クリジェス』と『ライオンを連れた騎士』を担当したほか、『聖杯の書』全３巻（2001 ～ 2009年）と『中世の短詩』（2018年）では編集責任者をつとめた。

大の親日家であり、1995年から2023年までに22度来日し、日仏共同研究にも継続的に参加している。たとえば、篠田知和基・丸山顕徳編『世界神話伝説大事典』（勉誠出版、2016年）では、８つの大項目と214の小項目を担当した。またヴァルテール氏の著作の邦訳には、原書房から刊行された『中世の祝祭―伝説・神話・起源』（初版2007年，第２版2012年）と『アーサー王神話大事典』（2018年）、中央大学出版部から刊行された『英雄の神話的諸相―ユーラシア神話試論I』（2019年）と『ユーラシアの女性神話―ユーラシア神話試論II』（2021年）がある。

クレティアン・ド・トロワ作『グラアルの物語』に隠された民話
人文研ブックレット　42

2023年６月30日　第１刷発行　©

非　売　品

著　者　フィリップ・ヴァルテール
（渡邉浩司訳）

〒192-0393　東京都八王子市東中野742-1
発行所　中央大学人文科学研究所
所長　深町英夫
☎042-674-3270

発行　中央大学人文科学研究所